

ロシア主導地域統合と「一帯一路」構想

湯浅 剛 (yuasa.takeshi@gmail.com)

1. 「一帯一路」国際協力サミット・フォーラム (5月14～15日)

(1) 要人参加状況 (報道による)

- ポスト・ソ連圏からの首脳クラスの参加は限定的 (大統領参加: ロシア、ベラルーシ、カザフスタン、クルグズスタン、ウズベキスタン / 閣僚参加: タジキスタン¹、アゼルバイジャン)²
- 上記以外の SCO 準加盟国からの参加 (大統領参加: トルコ / 首相参加: パキスタン、モンゴル、スリランカ、カンボジア / 閣僚級: アフガニスタン、ネパール、イラン)
→ インドの不参加 (中国・パキスタン経済回廊に対する反発)³

(2) プーチン発言 (15日、首脳どうしのラウンドテーブル会合にて)

「ロシアの関心は、ユーラシア経済同盟 (EAEU) の包括的発展に向けられている。(中略) EAEU はヨーロッパ、アジア、ラテンアメリカのおよそ 50 カ国から協力の意向が示されている。2016年10月にはベトナムとの FTA が発効。中国との貿易・経済協力、イスラエルとの FTA も交渉中。エジプト、イラン、インド、セルビア、シンガポールとも協議・合意を取り付けてきた。2015年5月、中ロは EAEU とシルクロード経済ベルト構想の枠内での統合プロセスを連携させることで合意した。いわゆる拡大ユーラシア・パートナーシップについても議論を重ねている。それは EAEU、上海協力機構 (SCO)、ASEAN の国々との間の多国間協力を発展させようとするもの。」

(3) 次回フォーラムは 2019 年 (アジア信頼醸成措置会議 [CICA] 閣僚会合 / 首脳会合開催との開催年重複回避?)

2. ロシア主導の地域統合構想: CSTO と EAEU の定着・制度化、さらなる構想の展開

- (1) 構想の契機としての 2011 年のプーチン論文「ユーラシアの新統合構想」(イズヴェスチヤ紙、11月4日掲載)
- (2) 二つの軸となる機構: 集団安全保障条約機構 (CSTO) ユーラシア経済同盟 (EAEU)
- (3) 拡大ユーラシア・パートナーシップ (初出は 2016年6月16日、国際経済フォーラムでのプーチン演説)

¹ <https://www.news.tj/ru/news/tajikistan/economic/20170515/itogi-bolshogo-foruma-v-pekine-okolo-70-stran-podpisali-soglasheniya-o-sotrudnichestve-s-ksnr>

² ウクライナはフォーラムへの参加を検討するも、5月初頭時点での報道では派遣する具体的な人名は不明 (http://news.xinhuanet.com/english/2017-05/01/c_136247844.htm)。

³ インドはさらに、「インド・中央アジア輸送回廊」「南北輸送回廊」によって、イラン領内チャー・バハール港の活用によるパキスタンを回避する輸送ルートの確保や、「アクト・イースト」政策によるアセアン諸国との連携強化を独自に進めている。

3. SCO、EAEU の展開と「一帯一路」の統合プロセス

(1) SCO : ①政治・外交協力、②貿易・経済協力、③文化・人的協力が基本方針

- 当初（2000 年代初頭）は、中国の多国間主義の代表的枠組み。SCO 枠内での FTA 創設も検討されていた。
- インド、パキスタンの正式加盟（2015 年ウファ首脳会合で発議、現在も手続きが進行中）。イラン加盟問題。
- 「2025 年までの SCO 発展戦略」（2015 年ウファ首脳会合で採択）

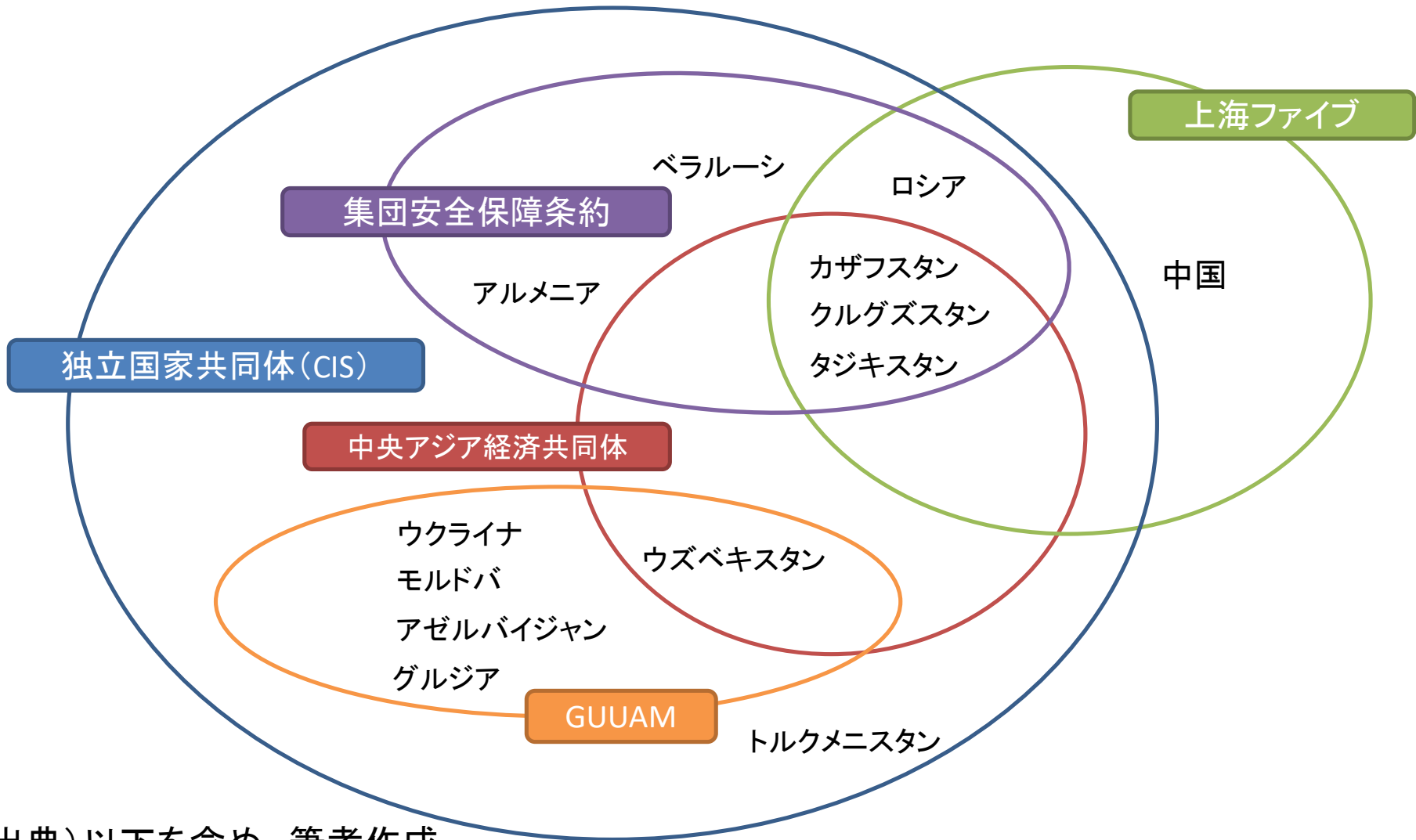
(2) EAEU

- 今後の展開（報道、ユーラシア発展銀行統合研究センター資料などから）
 - ・ 2017 年 7 月 1 日 改訂 EAEU 関税法典発効（16 年 12 月調印。ただし、ベラルーシのみ遅れて 17 年 4 月に調印）。
 - ・ 2019 年 単一電力・エネルギー市場
 - ・ 2022 年 EAEU 枠内での超国家的金融市場調整機関の設置
 - ・ 2025 年 ガス・石油・石油製品に関する単一市場
- 加盟国間の利害対立
- ロシアと中国の関係調整

4. 課題と展望

- (1) 「一帯一路」構想は、中長期的には、ユーラシアの管理を米国主導から中国（そして必要に応じてロシア）主導へシフトさせようとするもの。先般の「一帯一路」フォーラムは、中国の構想を内外に示す格好の場となった。ただし、「一帯一路」構想は、現状では米国に対するソフトバランスングのためのツールであるものの、それ以上の役割を備える構想となり得るのかどうかは、今後の課題。
- (2) 中国にとっては、そのほか、SCO や CICA がソフトバランスングのためのツールとして挙げられる。このうち、CICA は 2018 年には中国は議長国から退く。SCO については、今後も安全保障分野を含めた地域協力のフォーラムとして機能していくと考えられる。しかし、ツールとしての重要性は「一帯一路」構想の方が圧倒的に高まった。他方で、加盟国の凝集力や制度化といった点で、SCO の有効性も保たれている。
- (3) ロシアの関心事は、「一帯一路」構想と、SCO、EAEU、「拡大ユーラシア・パートナーシップ」との整合性。そのための取り決めの策定が今後の課題。

図1 中央アジアをとりまく主な多国間枠組み(1999年末)



(出典) 以下を含め、筆者作成。

図2 中央アジアをとりまく主な多国間枠組み(2010年末)

(注1) 2005年8月、CIS「准加盟国」となることを宣言。ただし、その後も同共同体の議長国を務めたこともある(2011年)。

(注2) ユーラシア経済共同体オブザーバー参加国。

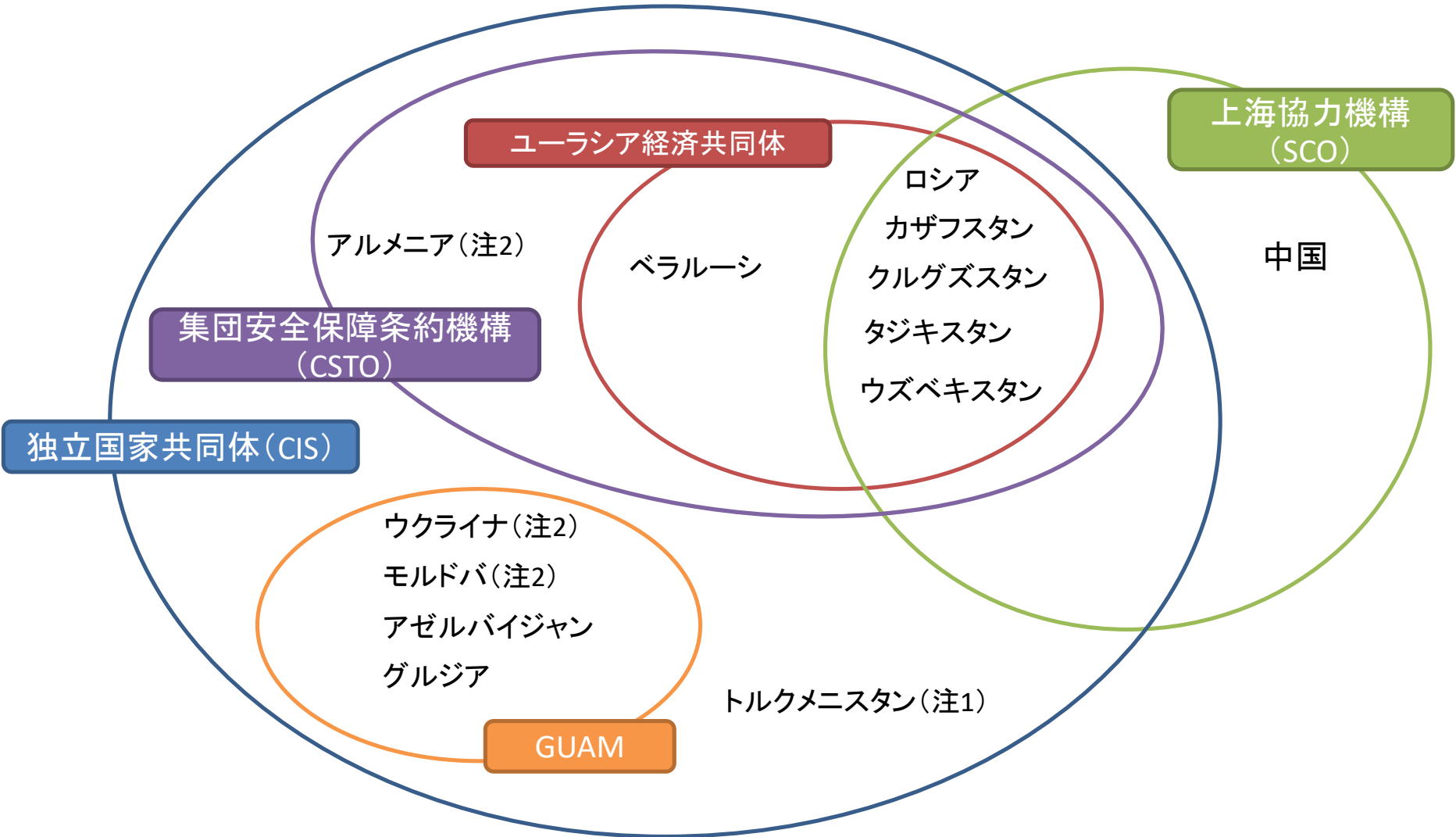
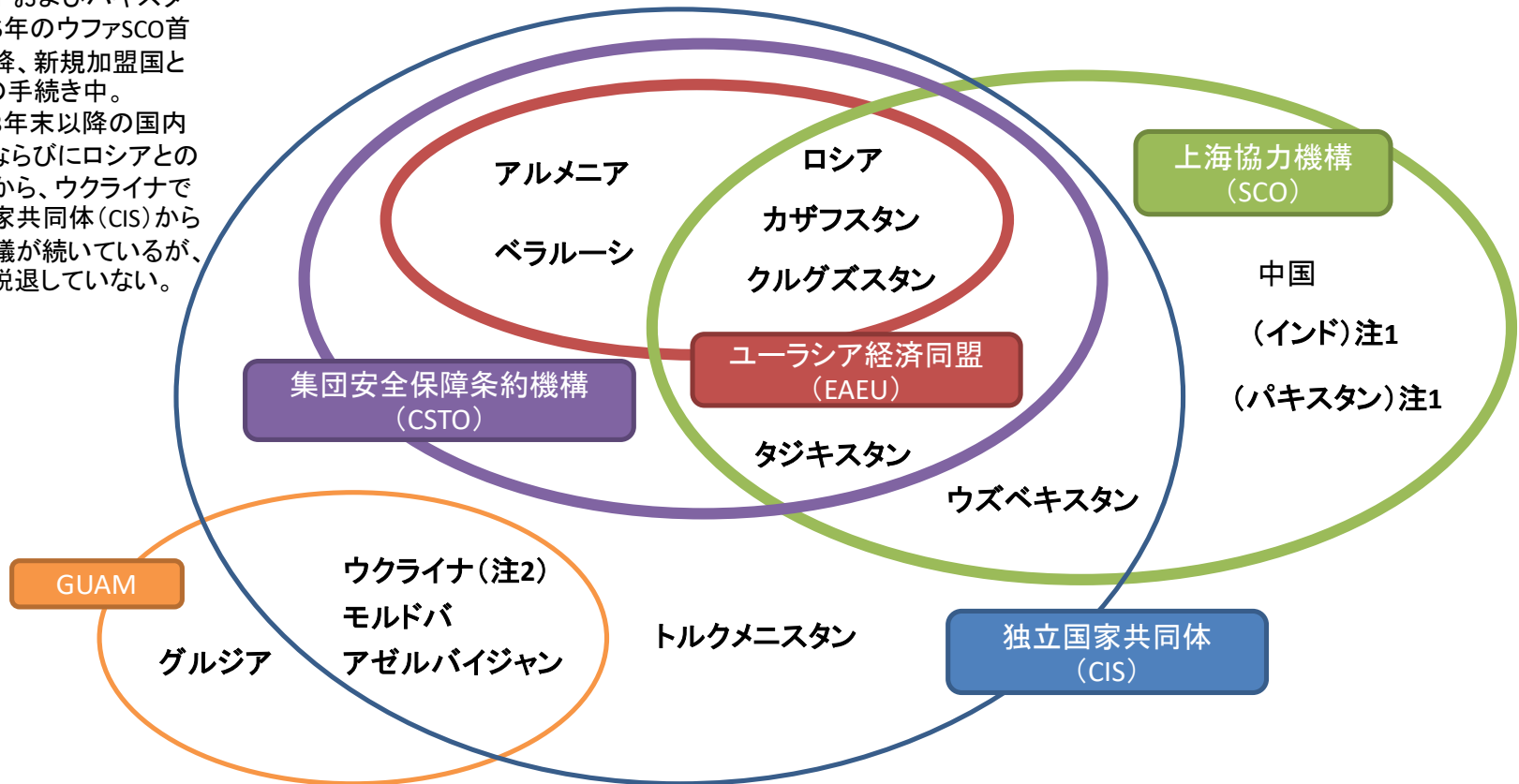


図3 中央アジアをとりまく主な多国間枠組み(2017年5月現在)

(注1)インドおよびパキスタンは、2015年のウファSCO首脳会合以降、新規加盟国となるための手続き中。

(注2)2013年末以降の国内での混乱ならびにロシアとの関係悪化から、ウクライナでは独立国家共同体(CIS)からの脱退論議が続いているが、正式には脱退していない。



India



(出典) <https://reconnectingasia.csis.org/analysis/competing-visions/>